

『三体詩幻雲抄』を通してみる室町時代における 漢籍流布の状況

劉 玲

0 はじめに

漢籍(中国の古典)が初めて日本に伝わったのは、遅くとも5世紀以前(大庭・王(1996) 8ペ)、または6世紀初頃の頃(神田(1987) 9ペ)とされる。奈良時代に入って、漢籍が大規模にもたらされるようになり、それ以降江戸時代にいたるまでの長い間、種々の漢籍が日本に伝わっていた。近頃出された巖(2007)によれば、現在日本における蔵書機関と個人蔵書に存する漢籍(明代と明代以前のもの)はおおよそ10000余部あるという。日本における漢籍流布の状況について、大庭・王(1996)は奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の三期¹に分けて検討している。そのうち、室町時代について、当時僧侶の間にとどのような漢籍が読まれていたかを把握するには、「禅僧の講義録である抄物類を調査して、そこに参照される漢籍を調べる必要があるだろう。ただ本稿では、その資料の所在を指摘するに留めておく」(67ペ)とし、明確に抄物資料を調査する必要であると指摘している。ただ、現在までそのような調査研究²がまだ見ない。

本稿では、内閣文庫蔵天文五(1536)年写『さんたいしげんうんしゅう三体詩幻雲抄』(以下「幻雲抄」と略す)を資料にして、抄文中に引用された漢籍に注目する。例えば、以下は幻雲抄の巻頭絶句「華清宮」についての抄文である。そのうち、(1)と(2)では、「江南」の意味について「村云」(希世壺彦の説)と「蘭云」(蘭坡景菴の説)を掲げており、そこに「樂天詩」と『唐音遺響』を引いている。(3)では、「華清宮」の命名由来について『玉海』から関連の記録を引いている。

- (1) 江南 村云 江南ハ 無尽ノ義アリトモ 樂天詩 朝自紫禁燭 養出責門去
莫道城東陌 即是江南路 言ハ 若欲赴江南者 出門レハ 即江南路ナルヘキ
ソ 聊尔ニテ云ソ [94-1 ~ 2]³
- (2) 蘭云 唐音遺響 刘禹錫和令狐相公別牡丹詩 莫道兩京非遠別 春明門外即天
涯 与樂天詩同意也 [94-3]
- (3) 養案 玉海⁴五十八注 會要云 天寶六載十月三日 改華清宮之名 [88-7]

幻雲抄において、このようにほとんど毎頁に漢籍の引用が見られる。本稿では、幻雲抄における漢籍引用の状況を調査することを通して、全体から室町時代における漢籍流布の状況を把握してみたい。具体的に、1節で、先行研究について紹介し、まとめる。

2節で、幻雲抄に関する情報及び幻雲抄を研究資料とした理由について述べる。3節で、幻雲抄に引用された漢籍の種類について説明し、本稿の研究対象とその様相について観察する。4節で、調査の結果を示し、幻雲抄における漢籍引用状況をまとめながら、室町時代における漢籍流布の状況を検討する。5節で、本稿で明らかにしたことをまとめ、今後の課題を述べる。

1 先行研究

本節では、まず、一般に漢籍流布の状況を研究する際の方法を紹介する。次に、室町時代における漢籍流布の状況に関する研究をまとめる。

1-1 漢籍流布の状況について研究する方法

当該時代にどのような漢籍が流布しているかについて、一般に二つの方法を用いている。一つは実物考証、すなわち現存する漢籍の実物を調査する。例えば、本来 30 巻あった『王勃集』は後に散佚したが、内藤 (1964)⁵は正倉院の蔵書において遺唐使によって 704 年に持ち帰ったと見られる唐鈔本が存するというを明らかにした。また、『足利学校遺跡図書館蔵漢籍善本目録』(1966)、『宋元文化与金沢文庫展資料目録』(1977)など種々の漢籍目録類はその蔵書機関に保存されている漢籍によって作られるもので、当該時代に流布する漢籍の模様がある程度知られる。また、前記の巖 (2007)では、日本に現存する漢籍 10000 余部について、漢籍ごとに付けた「按語」や「附録」から日本に流布する版本や時期などの情報を読み取れる。

もう一つは文献資料の考察、すなわち当該時代に残された文献資料を検討して、その中に使用されている漢籍を見出すという手法である。もし、文献資料の中に漢籍の書名がそのまま残っている場合であれば、当時にその漢籍が流布していることが自明である。例えば、周知の通り、『万葉集』巻 5 に収録されている山上憶良の「沈痾自哀文」には「在世大患 孰甚于此 志怪記云 廣平前大守北海徐玄方之女 年十八歳而死 其靈韻馮馬子曰…」 「威勢如海 誰為貴哉 遊仙窟曰 九泉下人 一錢不直…」とあり、『枕草子』第 197 段には「書は、文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。」とあり、『徒然草』第 13 段には「文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことは、南華の篇。」とあるように、『志怪記』(下線を引いた)などは記されており、それらは当時に流布していた漢籍だと判断できる。一方では、上記のように直接に漢籍の書名が記されていない場合でも、その文言や述作について考察することによって推定することができる。例えば奈良時代における漢籍について、岡田 (1954 <171 ペ>)では、聖徳太子の憲法十七條にある「有財之訟如石投水。乏者訴似水投石。」という文言は李康の『運命論』(『文選』(巻 27 に収録))にある「其言也、如以水投石、莫之受也。…其言也、如以石投水、莫之逆也。」に拠ったものと述べ、「文選の伝来を証するものなり」と指摘し、小島 (1962～1965)では『日本書紀』の述作にあたって『毛詩』や『文選』など 80 種

ほどの漢籍が参照されたと推定したように、それらの漢籍が当時に読まれていたはずである。

なお、かつて流布していた漢籍は後世に散佚してしまうケースが少なくないことを考慮すれば、文献資料の考察という方法は実物考証と比べて、より科学的であり、当時漢籍流布の状況を如実に反映できると考えられる。したがって、本稿では、この文献資料の考察という方法を用いる。

1-2 室町時代における漢籍流布の状況に関する研究

前文に挙げた日本そして中国における蔵書機関や個人によって作られた漢籍目録類によって日本に流布する漢籍の概略が知られ、参考しうるが、それらは室町時代に限るものではない。室町時代を対象として具体的に検討するものとしては、主として、以下のような研究が挙げられる。

①川瀬(1970)では、現存する五山版のうち、漢籍(外典)として78種を指摘し、またその現存の伝本を列挙し、解題を施している(同著解説篇)。そのうち、経部14種、史部6種、子部12種、集部46種ある。

②敝(1992)では、五山時代四百年の間、日本の僧侶たちが中国の文献資料を日本に伝える最も主要な担い手である(36ペ。原文を省く)と指摘し、五山僧によって中国から持ち帰られた漢籍を一部紹介している(46ペ～48ペ)。そのうち、建仁寺住持の天與清啓らが1464年に中国訪問の際に明朝政府から贈与された書物の目録においては漢籍が11種ほど、策彦周良(1501～1579)の日記『初渡集』と『再渡集』においては自ら購入したり友人から贈与された漢籍について17種ほどの書名を掲げている⁶。

③大庭・王(1996)では、「鎌倉・室町期の僧侶と中国古典籍」の節において、室町時代の僧侶の日記である『庶軒日録』(季弘大叔)、『蔭涼軒日録』(相国寺鹿苑院蔭涼軒の歴代軒主の公用日記)、『臥雲日件録抜尤』(瑞溪周鳳)の三つを調べ(62～66ペ)、それらに記されている漢籍を合わせて55種掲げている。また、足利学校・金沢文庫・妙覚寺常住日典・内藤湖南博士旧蔵現杏雨書屋の蔵書を調べ(67～70ペ)、室町時代に渡来した宋元明の貴重な版本を合わせて30余種指摘している。

④陳小法(2007)では、「禅僧閱讀的漢籍」の節(273～285ペ)において、当時に禅僧の間に流布する漢籍を知るには一つ一つ禅僧の著作の中から捜し求めるというのが有効な方法の一つである(273ペ。原文を省く)と指摘した上、『臥雲日件録抜尤』から漢籍を65種見出し(前記③の種類数と少々違う)、中に『論語』『四書』など儒学関係の書物及び歴史書、文学関係ないし老荘関係の書物が含まれている(309ペ)と述べている。

⑤下(2010)では、天隱竜澤(1422～1500)が編んだ『錦繡段』(中国の唐代から明代の詩の選本)を取り上げ、『錦繡段』入選詩歌の中国来源』の節(353～360ペ)において、『錦繡段』に収めた詩の出自・由来として総集・別集・詩話・筆記・語録・類書及び方志の類と多方面にわたって合わせて57種の漢籍を指摘し、それら当時の日本

に広く流布し読まれていた（359 ペ）と述べている。

以上の先行研究のうち、実物考証という方法を用いたもの（①と③の一部）と、文献資料の考察という方法を用いたもの（②、③の一部、④と⑤）の両方がある。重複を除けば、合わせておよそ165種⁷となる。しかし、本稿の調査でわかるように、幻雲抄に引用された漢籍の書物は266種も数え、先行研究の165種を大幅に超えており、先行研究にはない漢籍が数少なくない。現段階では、まさに陳（2007）の指摘通りに、種々の文献資料を調査研究の対象として探し求めていくべきである。これこそ、室町時代における漢籍流布の状況を全体から描かれるようになるだろう。本稿では、これまでまだ扱っていない抄物資料に着目し、試みる。

2 幻雲抄に関する情報及び幻雲抄を研究資料とした理由

三体詩（南宋の周弼編の唐詩選本）とその諸本⁸（「増注本」など計三種）、日本への伝来（南北朝時代）、三体詩の抄物（約18種）、幻雲抄の基本的情報などについては、すでに劉（2005a）・劉（2005b）・劉（2009）において坪井（1977）と谷澤（1977）によって度を重ねて紹介した。ここでは、要点のみを表1にまとめる。

【表1】幻雲抄に関する情報

成立事情：先人の三体詩の所説を五山僧の月舟寿桂（号は幻雲、1460～1533）が集成し、その弟子の継天寿戩が整理・補記して大永七年（1527）に成った。いわゆる取り合わせ抄物と言う。
使用テキスト：中田祝夫編・抄物大系所収影印本『内閣文庫蔵天文五年写本 三体詩幻雲抄』（坪井氏の解説を附す）。五冊からなり、抄文は47頁より約565頁。
底本：国立公文書館内閣文庫所蔵天文五年（1536）写「増註唐賢絶句三体詩法幻雲抄」、数人の手による転写本。
原典：通常「増注本」（天隠注に裴庾注を加えた）という。幻雲抄は原典の巻一に収めた七言絶句（174首）についての抄。
体裁：原典の本文（詩題・詩人名・詩本文・天隠注・裴庾注の5項目）と抄文を併載。原典の本文は天地に余白を持つ方形の枠線内に書かれ、抄文はほとんどがその枠線の後にほぼ紙面いっぱい小文字で書き込まれている。一部、枠線内や枠線外（つまりその四週）に書き込まれた抄文がある。

幻雲抄を本稿の研究資料とした理由については、以下の通りである。

一つ目は、幻雲抄は天文五年書写で、現存する室町時代の古写本として貴重であるとされている（坪井〈1977〉615ペ）。

二つ目は、幻雲抄には江西竜派、希世靈彦、桃源瑞仙など著名な学僧⁹を含む30余人の所説を含む。したがって、五山僧全体の読書の模様を知ることができ、それにより当時に一般に流布する漢籍を把握することができる。

三つ目は、幻雲抄においては、原典の5項目（表1を参照）をめくり、詩人の履歴・用字用語や詩句・事物や地名・異文や誤記、更に作詩の規範や方法など実に多方面にわたって、漢籍を大量に博引傍証しながら解釈説明をするのが幻雲抄全巻を通して見られる特徴¹⁰の一つである（劉〈2009〉58ペ。原文を省く）。後述するように、幻雲抄に引用された漢籍は266種で、計2060箇所である。

以上の3点からして、幻雲抄を本稿の研究資料とした。

3 幻雲抄に引用された漢籍の種類と本稿の研究対象

本節では、まず、幻雲抄に引用された漢籍の種類について説明する。次に、本稿の研究対象を述べ、その様相について観察する。

3-1 「著作集」の類と「単一の詩文」の類とする分類

実際、すでに劉（2005a）・劉（2005b）において述べた通り、幻雲抄に引用される漢籍¹¹の種類として、大きく「著作集」と「単一の詩文」の二つに分類できる。「著作集」の類とは、その漢籍の書名を引用文の直前または直後に記している場合である。例えば、前掲の（2）（3）では引用文（ 線を引く）の直前に書名（ 線を引く）の『唐音遺響』と『玉海』が記されており、次の（4）では引用文の直後に書名の『開元遺事』が記されている。

（4）祿山生日 上及貴妃賜衣服宝器 酒饌其厚 後三日召祿山入禁中 貴妃以錦綉為大襴褕 褰祿山使宮人以綵輿舁之 開元遺事¹² [88-17]

一方、「単一の詩文」の類（附録4）とは、書名が見えず、「○○詩」などのように詩人の名前の後にその表題や語句を示している場合である¹³。例えば、前掲（1）と次の二例では、詩人名である「樂天」「老杜」「劉禹錫」「孟郊」の後に詩句を示したり、「樂天想東遊五十韻」「劉禹錫和令狐相公」のように詩題も合わせて示す。

（5）行盡云々 雪樵本云 二句言明皇每歲十月与貴妃同輦 必幸驪山 故老杜詩云 君來必十月 樹羽臨九州 有時浴赤日 光抱空中樓 盖其盛可能知焉（中略） 其語乃本于樂天想東遊五十韻詩之朝從紫禁婦 暮出青門去 莫道城東陌 即是江南路 又劉禹錫和令狐相公詩 莫道兩京非遠別 春明門外即天涯之句 [91-4]

（6）蘭云 行盡 孟郊 春風得意馬蹄疾 一日看尽長安花 尽字為義類之 [92-18]

なお、「単一の詩文」の類のうち、その他の書物から引いた可能性も想定できるものがある。例えば、（5）に見る「劉禹錫 和令狐相公詩」については、前掲（2）に見る通りに『唐音遺響』から引いた箇所が幻雲抄に存在している。幻雲抄においてこの書物からの引用が合わせて84箇所（96-10/112-14など）もあるということを考え合わせれば、（5）は『唐音遺響』から引いた可能性があり得ないわけではない。また、（6）の孟郊「春風得意馬蹄疾 一日看尽長安花」という句は、実は以下に示す『唐才子傳』や『五燈會元』など多数の書物に記されている句である。『唐才子傳』は幻雲抄において最も多く

引用された(51-9/98-12/169-1 など計 167 箇所) 漢籍であり、また、『五燈会元』は五山版として應安元(1368)年に刊行され(川瀬〈1970〉321 頁)、『臥雲日件録抜尤』に宝徳三(1451)年より以降に三回も書名を書き留められている(陳小法〈2007〉275 頁)。つまり、この二書は当時禅林でよく読まれた書物だろうことを考えれば、五山僧なら誰でも孟郊のこの句を目にしたことがあり、人口に膾炙する著名な句だろうから、出典を一々記さないのも不思議ではない。

(7) 其初登第，吟曰：「昔日齟齬不足嗟，今朝曠蕩恩無涯。春風得意馬蹄疾，一日看盡長安花。」。(『唐才子傳』卷 5)

(8) 上堂 举：「『金剛經』云：「佛告須菩提，爾所国土，所有衆生若干種心，如來悉知。何以故？如來說，諸心皆為非心，是名為心。」要会么？春風得意馬蹄疾，一日看盡長安花。」。(『五燈会元』卷 20)。

3-2 本稿の研究対象とその様相

先に述べたように、「単一の詩文」の類のうち「著作集」の類に入れても可能なものがあるが、本稿では、「著作集」の類のみを研究対象としたい。

幻雲抄に見える「著作集」の類の様相は実に複雑である。以下に説明していく。

一つ目に、引用形式についてである。そのうち、前掲の(2)(4)のようにその書名¹⁴『唐音遺響』や『開元遺事』だけを記すのもあれば、(3)「玉海 五十八」のように巻数も記したり、次の諸例においては「皇朝名公詩人膏馥 汝陽周伯弼序」「毛詩 二 終風」「太平廣記 二百三十六 引明皇雜錄」「玉海 二十四 潘岳關中記」のように章や節、篇目(条)などをも併記するものもある。

(9) 幻謂 旧抄云 見玉屑 而按玉屑無此事 不足為證 又按皇朝名公詩人膏馥汝陽周伯弼序云 詩之桀矣矣 而絕句一体 小而難工(後略) [555-4]

(10) 毛詩二 終風 衛莊姜傷己也云々 不能正也 [108-4]

(11) 題下注 命陳湯中 幻按 太平廣記二百三十六 引明皇雜錄云(中略) 上甚恐 遂命撤去 而蓮華至今僅存 又嘗於宮中置長湯數十間屋(後略) [89-3 ~ 6]

(12) 關中 養按 玉海二十四 潘岳關中記曰 秦西以隴關為限(後略) [305-14]

一部、以下のように「里仁篇」「韋莊傳」と章や篇目(条)だけだが、抄文中における前後の引用関係から、書名の『唐才子傳』や『論語注疏』を略したと考えられる場合もある。

(13) 懷惠 又里仁篇 子曰 君子懷德 孔曰 懷安也 小人懷土 孔曰 重遷(後略) [149-11]

(14) 幻按 才子傳 張鼎傳 韋纜 亦進而無遇 退而有守者 詩各一卷 又韋莊傳 莊自來成都 尋得杜少陵所居浣花溪故址(後略) [545-14]

二つ目に、書名の記し方である。附表 2 を参照されたいが、通称のほかには当時に行われる略称・別称・異名などと思われるものを使われることが少なくない。例えば、以下に「事類聚」「事文」と記したのは、『事文類聚』(後掲(22))と通称される漢籍である。

(15) 寒食 養按 事類聚前集卷八 引荆楚歲時記曰 去冬至一百五日 即有疾風甚雨 謂之寒食(後略)「206-1」

(16) 紫閣 事文前集十八 白居易驪宮高詩 高々驪山上有宮 朱樓紫閣殿三四重 [100-9]

三つ目に、漢籍の引用はたいいてい原典の本文が表示される枠線後の抄文に現れているが、次の二パターンのものが少数ある。一つは、抄文の旁注か書き入れに見られる。例えば、次の(17)は「雪本」における『百川学海』に収めた『珊瑚鉤詩話』の引用だが、「闘毆争訟」の「毆」字の左旁には(18)のように『玉篇』の解釈を引いている。もう一つは、枠線内そして枠線外に書き込まれた抄文に見られる。例えば、(19)は枠線外に置かれ、当該詩の作者陸龜蒙について『才子傳』を引いてあり、(20)は枠線内に置かれた抄文で、原典の注にある「東樓」について『勝覽』を引いて説明している。

(17) 雪本 珊瑚詩話百川学海已集中 珊瑚鉤詩話卷第二 杜牧詩云 南朝四百八十寺(中略) 避老差役為私計耳 以故居積貨財貪毒酒色 闘毆争訟 公然為之 而弊未有過而問者 有識之士 每嘆息於此 [115-3 ~ 6]

(18) 毆 於口反 擊捶打也 玉篇 [115 抄文中]

(19) 字 魯望 姑蘇人 才子傳第八 [196 枠線外]

(20) 勝覽十五 寧国府宣城郡部不載東樓 又云 北樓謝朓建 [276 枠線内]

四つ目に、以上の諸例においてははずれもその漢籍から原文を引いている場合だが、一方、(21)~(24)のように、書名だけを記し、その漢籍から原文を引いていないという場合がある。中には、一部(25)~(27)のように、抄文の旁注か書き入れ、また枠線内そして枠線外に書き込まれた抄文にも見られる。

(21) 村云 昭陽ノ殿ト 文選ニ讀也 [246-8]

(22) (前略) 但シ此事彼ニ載タルコト 処々ニ 諸典ニアリ 詳ニ記タル処ヲ可考 養謂 麻姑壇記見于事文類聚前集三十三 [409-5]

(23) 二十五絃 漢書 郊祀 養按 莊子人間世曰(後略) [109-5]

(24) 村云 少一人三字ハ 史記ニテ アルヲ 今ヤワラケテ 用ハ 妙也 [405-9]

(25) 見漁隱叢話杜牧章 [115-1 抄文中]¹⁶

(26) 幻謂 非也 唐唯四已亥耳 少微通鑑以貞元十一年作已亥 蓋刀筆誤也 可作乙亥 又資治通鑑唐紀作乙亥 [369 枠線外]

(27) 拗体 玉屑謂之拗句 詩法源流亦謂之拗字格 拗猶挾也 [567 枠線内]

これらは、その漢籍に所在するまたはその漢籍を閲覽し参照したと理解できよう。便宜上、そうした漢籍の原文を引いて示す場合を「引用型」と、漢籍の原文を引いていない場合を「参照型」と呼ぶことにする。

以上述べてきたように、幻雲抄の中に引用される漢籍のうちに、その漢籍の書名を記している「著作集」の類と、その書名を記していない「単一の詩文」の類の二種類が見られるが、本稿の研究対象とするのは「著作集」の類のほうであり、中に「引用型」と「参

照型」が含まれる。なお、「参照型」にあつて「引用型」にないのはわずか12種である（附録2と附録3に線を引いた）。

4 調査の結果と分析

本節では、まず、「著作集」の類を対象にした調査結果を述べる。次に、調査結果に基づいて、幻雲抄における漢籍引用（以下では「著作集」の類に限っていう）の状況について検討し、それによって室町時代における漢籍流布の状況を把握してみる。

4-1 調査の結果

幻雲抄においてどのような漢籍が引用されているかを調べてみた（有効頁数は約565頁）。調査の結果は表2の通りである。なお、一回のみの調査で、少々誤りがあることを断っておく。

【表2】研究対象とした「著作集」の類についての調査結果

引用型	参照型	総計
262種、1729箇所	77種、331箇所	266種、2060箇所

（※箇所数は延べ数。漢籍の同一部分を数回引く場合は数箇所とする）。

すなわち、合わせて266種あり¹⁷、2060箇所ほど見られている。そのうち、その漢籍から原文を引いて示す「引用型」は262種、1729箇所あり、また漢籍から原文を引いていない「参照型」は77種、331箇所ある。ちなみに、本稿の研究対象ではないが、前文で紹介した「単一の詩文」¹⁸の類では、作者91名のもので、280箇所ある。

表2に示したそれら266種の漢籍について、四部分類法によって整理すると、表3のようになる。

【表3】四部における分布（「著作集」の類）

		引用型	参照型	総計
A. 四庫類に書名に見えるもの	経部	23種、269箇所	11種、34箇所	24種、303箇所
	史部	38種、440箇所	13種、86箇所	41種、526箇所
	子部	63種、261箇所	18種、35箇所	65種、306箇所
	集部	78種、476箇所	26種、129箇所	83種、605箇所
	計	203種、1445箇所	64種、284箇所	203種、1729箇所
B. 四庫類に書名の見えないもの		59種、284箇所	13種、47箇所	63種、331箇所
総計		262種、1729箇所	77種、331箇所	266種、2060箇所

（※「計」はAの場合の総計を、「総計」はBを含めた場合の総計を示す）

「A. 四庫類に書名の見えるもの」と「B. 四庫類に書名の見えないもの」とに分けてみたが、その際に以下に掲げる四庫類の資料によった。

四庫全書研究所編『欽定四庫全書総目』（整理本）中華書局 1997 胡玉緝撰・王欣夫輯『四庫全書總目提要補正』上海書店出版社 1998 續修四庫全書編纂委員會・復旦大学圖書館古籍部『續修四庫全書：總目錄索引』上海古籍出版社 2003 四庫禁燬書叢刊編纂委員會『四庫禁燬書叢刊：索引』北京出版社 1998 四庫禁燬書叢刊補編編纂委員會『四庫禁燬書叢刊補編：總目錄』（『四庫禁燬書叢刊補編』第 90 冊附録）北京出版社 2005 四庫全書存目叢書編纂委員會『四庫全書存目叢書：目錄索引』齊魯書社 1997 四庫全書存目叢書補編編纂委員會『四庫全書存目叢書補編：目錄索引』齊魯書社 2001 北京圖書館編『文淵閣四庫全書補遺』——據文津閣四庫全書補 北京圖書館出版社 1997 『四部叢刊 総目』（初編・二編・三編）上海書店 1984～1985 『四部備考総目』台湾中華書局民国 57～71 年

そのうち、「A. 四庫類に書名の見えるもの」としたのは次の（ア）か（イ）のいずれである。附録 2 に掲げた。

（ア）幻雲抄に見られる漢籍の書名はこれらの資料に収めているものと一致する。例えば、前掲（2）『事文類聚』は子部類書類に、（8）『唐音遺響』は集部総集類に全く同名のものが見える。計 94 種。

（イ）幻雲抄の書名はこれらの資料に収録しているものとは全く一致するのではないが、同一種の書物だろうと判断できる。例えば、（5）『開元遺事』は子部小説家類に見える『開元天寶遺事』で、（20）『少微通鑑』は史部編年類に見える『少微通鑑節要』で、（12）『毛詩』は經部詩類に見える『毛詩正義』か『毛詩注疏』のどちらかだと判断する。計 109 種。

一方、「B 四庫類に書名の見えないもの」としたのは、前掲の（9）『皇朝名公詩人膏馥』などのように、四庫類の資料には書名またはそれらしい書名は全く見えない場合のものである。附録 3 に掲げた。中に、「半山詩話」（480-4）（王安石の詩話か）など時代も作者も知り得ず、正体不明なものが若干含まれる。

幻雲抄に引用された漢籍 266 種のうち、四庫類に書名の見えるものは 203 種、1729 箇所あり、四庫類に書名の見えないものは 66 種、331 箇所あると確認できた。なお、今回これら四庫類の資料のみを用いたが、『千頃堂書目』（巻 31 総集類 [補] 宋に『詩林萬選』を録す）、『直齋書錄解題』（巻 6 職官類に『職林』を録す）などを参照すれば、書名の見えるものが更に数種ほど増える。けれど、研究対象とした漢籍 266 種という全体の数が変わらず、以下 4-2 における検討に対してほとんど影響しない。

では、以上の調査結果からどのようなことがわかるだろうか。

4-2 幻雲抄における漢籍引用の状況及び室町時代における漢籍流布の状況

幻雲抄に引用された漢籍が 266 種であり、先行研究の合計（165 種）を超えている

ことから考えれば、室町時代にどのような漢籍が流布していたか、幻雲抄によって補足できるということはあり得よう。では、幻雲抄における漢籍引用の状況、そしてそこから観察される室町時代における漢籍流布の状況について、先述の調査結果に基づき、以下の諸点をめぐって検討する。

①四部における分布について

前掲表3(計一)に見るとおり、203種中経部に24種(303箇所)、史部に41種(526箇所)、子部に65種(306箇所)、集部に83種(605箇所)とあるように、四部のそれぞれに見られる。しかも、その内部分布については、それぞれ経部に易類など7ジャンル、史部に正史類など12ジャンル、子部に儒家類など11ジャンル、集部に楚辞類など3ジャンルあり、合わせて33ジャンルである(附録2を参照)。つまり、幻雲抄に引用された漢籍は、『四庫全書』に存するジャンル(計44)の三分の一にわたっている。このことから、室町時代に流布する漢籍の範囲がどれほど幅広いものか明らかである。

②注目されるジャンルについて

33ジャンル中に含まれる漢籍の種類を見ると、例えば、史部官職類に『六典』・職記類に『越絶書』、子部兵家類に『尉繚子』・農家類に『瑣碎録』とあるように、そのジャンルに漢籍が1種のみの場合があるが、次の八つのジャンルにおいてそれぞれ10種またはそれ以上見られる(詳細は附表2を参照)。最も多く見られるのは、集部に属す詩文評類で、21種である。幻雲抄は三体詩の注釈として成立したということを考えれば、詩文集類が最も多いというのは幻雲抄一資料の個性だと理解されようでも、その他の7ジャンルは、やはり室町時代に流布する漢籍の主要なジャンルとその主要なものの一部を示すと考える。

経部：小学類 10種 史部：正史類 13種

子部：雑家類 14種、類書類 16種、小説家類 16種

集部：別集類 宋以前 14種・宋以降 13種、総集類 20種、詩文評類 21種

③引用の頻度・回数について

幻雲抄において、『南齊書』(史部正史類)、『賓退録』(子部雑家類)、『皇明詩選』(集部詩文評類)、『東坡楽府』(四庫未収)、『白氏六帖』(同)などのように一、二箇所だけ見られる漢籍もあれば、百数十箇所も見られる漢籍もあり、引かれる頻度において大きく相違する(附録2と附録3を参照)。次の表4に15箇所かそれ以上引用されるものをまとめた。計30種であり¹⁹、経・史・集の三部はそれぞれ7種で、子部は5種である。そのうち、唐代詩人の履歴や生涯を調べるには不可欠である『才子傳』(167箇所)、三体詩に収める絶句を和す形で成立した「巖子安次三体唐詩三体家法絶句之和」(140箇所)と「張楷和唐詩正音」(33箇所)、唐詩選本という性格をもつ『唐音』(84箇所)と唐詩を対象とした詩文評類である『唐詩』(18箇所)の5種は、三体詩の注釈だから重んじて用いられ、必ずしも当時一般に流布する書物ではないと考えられる。それでも、この5種を除いた25種だけで、合わせて733箇所となり、全引用箇所数2060箇所の三分の一以上を占めるということである。つまり、これら幻雲抄に引用頻度の高い漢籍のうち、

一部は『才子傳』などのように特に幻雲抄によく用いられる漢籍がある一方で、『方輿勝覽』などのように幻雲抄に限らず、同時に一般に流布し、日常閲覽していた漢籍が多い。事実、これら 30 種中、 線を引いた 6 種以外はすべて先行研究にも見られるのである。

【表 4】 15 箇所かそれ以上引用される漢籍（計 30 種）

四庫類に書名の見えるもの：26 種

才子傳 167 (史・伝記)	方輿勝覽 92 (史・地理)	唐音 84 (集・総集)
文選 86 (集・総集)	漁隱叢話 66 (集・詩文評)	事文類聚 63 (子・類書)
玉屑 56 (子・類書)	韻會 58 (経・小学)	毛詩 50 (経・詩類)
史記 50 (史・正史)	漢書 49 (史・正史)	新唐書 46 (史・正類)
太平廣記 32 (子・類書)	東坡集 36 (集・別集)	玉海 29 (子・類書)
玉篇 27 (経・小学)	左傳 23 (経・春秋)	論語 21 (経・四書)
説文 21 箇所 (経・小学)	增韻 21 (経・小学)	韻府 19 (子・類書)
楚辭 19 (集・楚辭類)	唐詩 (唐詩紀事) 18 (集・詩文評)	杜集 16 (集・別集)
資治通鑑 16 (史・編年)	後漢書 15 (史・正史)	

四庫類に書名の見えないもの：4 種

嚴子安次三体唐詩三体家法絶句之和 140	張楷和唐詩正音 33
聯珠詩格 26	詩林萬選 17

(※数字は箇所数。書名は附録 2 の通りで、書名が複数ある場合は最初のみを示す。)

④現存しない漢籍の使用について

幻雲抄に引用された漢籍のうち、現存しないまたは中国国内に古くから散逸したとされるものが少なくない。その一つに、表 4 に掲げた嚴子安（明の人）の「次三体唐詩三体家法絶句之和」(599-20) が挙げられる。実は、幻雲抄において、ほかにも「嚴子安次三体家法」(49-16)、「嚴子安次唐詩三体家法」(81-12)、「嚴子安次韻絶句」(88-23) とあるように、嚴子安が三体詩の絶句を対象にして「和韻詩」の書を作ったという記録を残している。それだけでなく、「和詩」は「子安和云」などの形で全文を引用しており、計 163 首確認できた（これについて劉〈投稿中〉において議論している）。

(28) 子安和云 春風曉過故候家 邀入南園看麗華 滿眼深紅間淺綠 流鶯徧住海棠花 [290-2]

(29) 雪云 和曰 上陽宮廢黍離々 千古成墟事若疑 惆悵黃昏人靜後 數聲鳥鵲噪寒枝 嚴子安 [212-17]

嚴子安のほか、「張楷和唐詩正音第五寄別朱拾遺」(225-14)、「張楷和唐音逢賈島詩」(111-12) などに見るように、明の張楷は『唐詩正音』を対象にして「和韻詩」の書を作ったと見られる。次に掲げた書物は、幻雲抄においてたいてい 1～3 箇所だけ引用されたものだが、いずれも現存しない。そして、これらの漢籍はほとんど「引用型」であるところが興味深く、その原本を復元するためのデータとして重宝すべきである。一方では、これらの書物は現在存しないけれど、かつて室町時代において五山僧の間で使わ

れていたことが明らかであろう。

唐登科記 (549-3) 唐・李昉

蔡寬夫詩話 (117-3) 北宋・蔡肩

王直方詩話 (537-5) 北宋・王直方

古今詩話 (335-9) 北宋・李頎

陳輔之詩話 (431-11) 北宋・陳輔之

玉林中興詩話 (72-16) 南宋・黃昇

以上、本節では、四部における分布・注目されるジャンル・引用の頻度・現存しない漢籍の使用の4点から幻雲抄における漢籍引用の状況を検討して、室町時代における漢籍流布の状況を把握してみた。

5 まとめと課題

本稿では、文献資料の考察という方法を用いて、幻雲抄に引用された漢籍(266種、2060箇所)を見出した上、四部における分布・注目されるジャンル・引用の頻度・現存しない漢籍の使用の4点から、幻雲抄における漢籍引用の状況を検討して、室町時代における漢籍流布の状況を把握してみた。全体から、おおよそ次のようなことがわかった。すなわち、(ア)幻雲抄に引用された漢籍は経史子集の合わせて計33ジャンルつまり『四庫全書』の三分の一のジャンルに分布しており、室町時代に流布する漢籍の幅広いことが明らかになった。(イ)漢籍が10種またはそれ以上見られた集部詩文評類(21種)をはじめとする8ジャンルは、幻雲抄にのみ多用されるものだけでなく、室町時代に流布する漢籍の主要なジャンルとその主要な漢籍の一部でもある。(ウ)引用頻度の高い漢籍(30種)のうち、『才子傳』をはじめとする5種は幻雲抄に多く見られるものだが、残り『方輿勝覽』など25種の漢籍は当時日常的に閲覧され、一般に流布しているものと考えられる。(エ)「嚴子安次三体唐詩三体家法絶句之和」など数種の漢籍は現存しないが、幻雲抄にその原文の引用が確認できており、室町時代において流布していたことが明らかになった。

なお、本稿は室町時代における漢籍流布の状況を全体から把握しようとしたもので、細部については検討することができなかった。例えば、「魯論」と記したものは『論語』とどういう関係にあるか。現存しないとされる『蔡寬夫詩話』は当時に存在していたのか、それとも『茗溪漁隱叢話』からの孫びきにしかすぎないのか。また、杜甫詩に関して、三つある伝本のうちのどれから引用したのか。こういった漢籍の伝本や底本の問題を当面の課題としておきたい。

一方、抄物資料はこれまでほとんど室町時代語資料として扱われてきたが、1頁あたり漢籍の引用は3箇所²⁰も見られており、数種もの先行研究に指摘した漢籍の種類を大幅に超えているという点からして、幻雲抄は漢籍流布の研究に有難い貴重な資料であり、幻雲抄の資料的性格を端的に示していると言える。本稿の議論を通して、大庭・王(1996)の指摘した「抄物類を調査する」必要性が確認できたと同時に、漢籍流布とい

う観点からこれまで問題にしていなかった抄物が持つ新しい一面を窺うことができた
と考える。

注

- 1 時代区分については、その他敏（1992）では、6世紀～8世紀、8世紀～12世紀、13世紀～16世紀、17世紀～19世紀中ばとする分け方をしており、室町時代を含む13世紀～16世紀を「以禅宗僧侶为主体的伝播形式」（36頁）として考えられている。
- 2 劉（2005a）と劉（2005b）では、『三体詩幻雲抄』巻一冒頭の6首絶句についての抄文を調べ、その中に引用された漢籍を「単一の詩文」（22首、27箇所）と「著作集」（57部、147箇所）の二類に整理した。なお、「単一の詩文」と「著作集」とする分類のしかたについて後に3-1でまた述べる。
- 3 [] 中に、2節で紹介する幻雲抄のテキストにおける所在の頁数を表し、必要でない場合は開始頁のみを示す。なお、一部古体・異体の漢字・仮名は原則として通行の字体にあらためた。また、振仮名や返り点、見消し・挿入符・旁注・書き入れの指示などは反映していない。
- 4 『玉海』（使用した漢籍のテキストについて附録1を参照。以下同様）巻第五十八には見えず、巻一百五十八・宮室・宮に「會要是年十月三日 改華清宮之名」とある。巻数の誤記か。
- 5 内藤（1964）は未見。大庭・王（1996〈19頁〉）の紹介による。
- 6 その他、同著（43～46頁）では、1211年に僧侶の俊苳は朱子『四書集注』初刊本を含む719巻もある漢籍を日本に持ち帰ったと紹介したが、書名はあがっていない。また、聖一國師によって1241年に持ち帰った千巻もの中国の書物（仏典を含む）のうちに漢籍も数多くあり、1353年編『普門院経論章疏語録備書等目録』によれば94種あることを紹介した。ただ、その94種のうち『太平御覽』『中庸説』『呂氏家塾讀詩記』『樂善泉』『歴代地理指掌図』のわずか6部以外にすべて散佚した。
- 7 厳密ではないが、例えば大庭・王（1996）では、「毛詩正義」（杏雨書屋蔵）と「毛詩注疏」（足利学校蔵）の両方を記しているが、本稿では1種として見る。
- 8 その他、日本に存する三体詩の諸本については村上（1978〈27頁～34頁〉）が詳しい。また、最新の研究としては、陳斐（2010〈115頁～118頁〉）が挙げられ、同著では中国国内ないし日本・韓国に現存する諸本を調査している。
- 9 坪井（1977〈625頁～629頁〉）では、これら所説を引く禅僧の道号法諱を時代順に並べて示している。これによれば、そのうち義堂周信（1325～1388）を含む4人は室町時代には生存しない。本稿では室町時代を対象にしているので、厳密にその四人の説に引用された漢籍を調査の対象外にすべきだろうが、今回一々に確認することができなかった。
- 10 もう一つ三体詩の抄物である『三体詩素隠抄』と比べると、幻雲抄における漢籍の引用が甚だしいものとわかる。例えば、第一冊（6首の絶句）に引用された漢籍（「著作集」の類）として、幻雲抄において57部、147箇所（注2を参照）見られる。これに対して、同じくその6首についてだが、『三体詩素隠抄』においては「明皇雜録」（54頁）・「資治通鑑」（59頁）・「楚辭」（59頁）・「史記」（64頁）・「許彦周詩話」（68頁）・「才子傳」（68頁）のわずか6部しか見られない。
- 11 本稿では、『全集集』（390-13）など禅僧の詩文集については調査の対象とするが、「枯崖漫録」（74-12）・「傳灯録」（337-7）など禅籍の類及び「大集経」（228-6）・「観経」（286-1）など仏典類とその関係の書物については対象としない。およそ25種あり、ほとんど一箇所のみ現れている。以下にはほぼ時代順によって一覧する。（ ）内に通称を、その前に幻雲抄に記す書名を入れる。大集経（具名大方等大集経）、出曜経、観経（仏説観無量寿仏経）、起信庵愚談（起信論）、首楞嚴（大佛頂首楞嚴経）、善住天子所問経、仁王護国般若波羅蜜経（仏説仁王護国般若波羅蜜経）、大般若（大般若波羅蜜多経）、俱舍頌（俱舍論頌）、瑞應傳（西方往生瑞應傳）、釈迦方志、大惠普説（大惠普覚禅師法語）、筆削記（起信論疏筆削記）、碧岩（仏果圓悟禅師碧岩録）、傳灯録（景德傳灯録）、龍舒居士日休浄土文（龍舒浄土文）、枯崖漫録（枯崖和尚漫録）、釈氏通鑑（歴代編年釈氏通鑑）、編年通論（隆興仏教編年通論）、佛祖統紀、中峰広録（天目中峰和尚広録）、釈氏稽古略、尚直編、統傳灯（統傳灯録）、山荘雜録、仙経（太上玄元開化仙経品 < 道教典籍 >）

- 12 ここは「開元遺事」すなわち『開元天寶遺事』と記しているが、その中には見えない。そのかわり、『資治通鑑』巻二百一十六・唐紀三十二・玄宗天寶十載の節に同文のものが確認できた。書名の誤記か。
- 13 「単一の詩文」の記し方について、劉（2005a）4-1「A 作者名」、「C 詩文の表題」と「D 引用にあった詩句」の項で詳しく紹介しており、参照されたい。
- 14 次の抄文中において、『石門文集』と記して、「行尽湘西十里松」から最後まですべて『石門文集』から引いたように見える。しかし、実は『石門文集』にはaだけが見え、bの部分は見えない。そのかわり『珊瑚鈎詩話』の巻三にbと同文のものが確認できた。その書名を落としたからだろうか。
- 行尽云々 村菴曰 石門文集云 a 行尽湘西十里松 到門却立巽諍峯 崇公遺迹無尋處 階下春泥見虎蹤 由是言之 行尽字屬杜則可也 b 答有獻李衡公以古木者 曰有異 公命割之 作選甕槽 自然其文成白鶴 予嘗語吳次膺曰 公綠頭鴨琵琶詞誠妙絕 蓋自曉風殘月之後 始有移船出塞之曲 云々 [91-12]
- 15 その中に、原文通りに丸写すという場合もあれば、必ずしもそうでない場合がある。例えば、前掲（13）については、『論語注疏』に全く同文のものが確認できた。これに対して、(11)に見る「而蓮華至今僅存 又嘗於宮中置長湯數十間屋」という部分については、『太平廣記』巻第二百三十六・玄宗に「其蓮華至今猶存 又嘗於宮中置長湯屋數十間」とあり、用語上や行文上の相違が見られる。
- 16 ここは「本集云 江南道中春望 杜牧赴宣州 沈傳師幕府時作之 [115-1]」と書かれる抄文の「沈傳師」右旁に書き込まれている。
- 17 なお、注12、注14に述べた書名を誤記したり書名を落としたりすると考えられる場合について、すべては確認できなかったため、一応幻雲抄の記載に従う。なお、こうした誤りは幻雲抄の成立事情と底本の状況からして、作成者の幻雲らや後の転写者によるものか、本来先人の説にあったものかは直ちに判断できない。これについてまた別稿で考えたい。
- 18 「単一の詩文」について、同様にその詩文から原文を引いたか否かによって「引用型」と「参照型」とに分けてみると、うちに「引用型」は89名、268箇所見られ、「参照型」は6名、12箇所見られる（附表4を参照）。例えば、前掲の（1）や（5）は「樂天」や「老杜」の詩の本文を示している「引用型」である。一方、次のように、「王維」や「杜牧」のその詩の詩題のみで、本文を示していないので、「参照型」であろう。
- 補云 王維送元二使安西詩 杜牧念昔遊詩 声律雖異常 能諧律 故無害也 [404-6]
- 19 村上（1994）などでは、当時に宋の蘇東坡と黄山谷がよく読まれたと指摘し、陳小法（2007）に「坡別集」・「東坡詩注」や「山谷集」など記録されているが、本稿では山谷はこの30種に入っていない。実は、本稿の調査では「著作集」の類には「東坡集」（36箇所）と「増注山谷集」（9箇所）があり、「単一の詩文」の類には「東坡（詩）」（49箇所）と「山谷（詩）」（16箇所）がある。両方を合わせれば、それぞれは85箇所と25箇所となり、いずれも多く引用される漢籍のグループに入る。やはり先行研究の指摘を裏付けられる。
- 20 表1において紹介した通り、幻雲抄では、抄文は約565頁あり、その中に引用された漢籍は計2060箇所見られたので、平均して1頁あたり3箇所以上となる。

参考文献（本稿で言及・引用したもののみ）

大庭 脩・王 勇（1996）『日中文化交流史叢書 9 典籍』大修館書店

岡田 正之（1954）『日本漢文学史 増訂版』吉川弘文館

小島 憲之（1962～1965）『上代日本文学与中国文学——出典論を中心とする比較文学的考察——』（上中下）

川瀬 一馬（1970）『五山版の研究』The Antiquarian Booksellers Association of Japan.

神田 喜一郎（1987）『神田喜一郎全集 第八巻』同朋舎出版

蔽 紹盪（1992）『以禪宗僧侶为主体的伝播形式（十三世紀——十六世紀）』『漢籍在日本的流布研究』江蘇古籍出版社

蔽 紹盪（2007）『日藏漢籍善本書録』中華書局

谷澤 尚一（1977）『解説』中田祝夫編・抄物大系『国立国会図書館蔵三体詩素隠抄』勉誠社（1977.9）、卷末所収

坪井 美樹（1977）『解説』中田祝夫編・抄物大系『内閣文庫蔵天文五年写本 三体詩幻雲抄』勉誠社（1977.6）、卷末所収

陳 小法（2007）『「臥雲日伴録抜尤」與中日典籍交流』『域外漢籍研究集刊』第三輯、中華書局

陳 斐（2010）『「三体唐詩」版本考』『齊魯學刊』2010年第2期

内藤 虎次郎（1928）『正倉院尊蔵二日鈔本に就きて 二 王勃集』

下 東波（2010）『天隱竜澤『錦繡段』文献問題之考訂』『域外漢籍研究集刊』第六輯、中華書局

村上 哲見（1978）『中国古典選9 三体詩（一）』朝日新聞社

劉 玲（2005a）『「三体詩幻雲抄」における漢籍の引用（2）——「単一の詩文」の類——』福井大学国語学会『国語国文学』44号（2005. 3）

劉 玲（2005b）『「三体詩幻雲抄」における漢籍の引用（1）——「著作集」の類——』北京師範大学日文系編『日語教育与日本学研究論叢』第二輯（2005. 8）

劉 玲（2009）『注釈中国古典文献の日本漢籍抄物——以日本内閣文庫蔵天文五年写本『三体詩幻雲抄』為例』北京師範大学学報（社会科学版）2009年第4期

劉 玲（投稿中）『日本室町時代の五山僧抄物『三体詩幻雲抄』之蔽子安『和三体詩』輯佚』『千頃堂書目』（翟鳳起、潘景鄭整理）上海古籍出版社2001

『直齋書錄解題』上海古籍出版社1987

< 附録1> 原典調査などで使用した漢籍のテキスト

『韻語陽秋』（影印本）上海古籍出版社出版1984、『開元天寶遺事』中華書局1985、『玉海』（四庫類書叢刊）上海古籍出版社1992、『古今事文類聚』（四庫類書叢刊）上海古籍出版社1992、『五燈會元』（蘇淵雷点校）中華書局1984、『珊瑚鉤詩話』（叢書集成初編2550）中華書局1985、『詩人玉屑』上海古籍出版社1978、『資治通鑑』中華書局1956、『石門文字禪』（文津閣四庫全書第三七三冊）商務印書館2005、『太平廣記』中華書局1961、『唐才子傳校箋』中華書局1987、『論語注疏』（『十三經注疏 附校勘記及識語』所収）中華書局1980

< 附録2> 「著作集」の類：四庫類に掲げているもの

※1) 幻雲抄に記される書名は先に掲げて、その後に（ ）内に四庫類に録する書名の一つか二つを入れる。四庫類には幻雲抄の書名（最初に掲げるもの）と一致する場合は特に記さない。2) 幻雲抄における所在の頁数、引用に記された巻数や篇目などについては紙幅の都合で略く。3) 算用数字は箇所数で、「引用型」/「参照型」の順で示す。4) 線を引いたのは「参照型」にのみ見えるものである。5) 「杜詩某卷」などは巻数などが記された場合である。

經部 易類：周易・易（周易正義）11/1、傳義（伊川易傳）1 書類：尚書・書（尚書正義）10/2、古文尚書1、別録（禹貢彙疏？）1 詩類：毛詩・詩（毛詩正義）41/9、詩傳通釈1 禮類：周禮（周禮注疏）5、禮記・禮（禮記正義）14 春秋類：左傳・春秋經（春秋左傳正義）19/4 四書類：孟子（孟子注疏）3、論語・魯論（論語注疏）17/4、集注・新云・朱子集注・朱子注（論語集注）5/3、中庸（中庸章句）2 小学類：爾雅（爾雅注疏）6、廣雅3、埤雅4/1、說文・許子說文（說文解字）20/1、玉篇・篇（重修玉篇）25/2、五音類聚（改並五音類聚四篇）1、廣韻（重修廣韻）6、集韻1、增韻・毛晃（略增韻互注札部韻略）21、韻會・拳要（古今韻會拳要）52/6 **史部** 正史類：史記・史（史記正義）43/7、漢書・前漢書・前漢・前・漢43/6、後漢書・司馬彪統漢書・後漢11/4、三國志3、晉書・

晋 8/1、**南齊書** 1、隋書 隋 2、南史 5/1、北史 1、旧唐書・旧唐 1、旧史 4、新唐書・唐書・新唐 1、唐 1、宋
 祈新史 27/19、五代史（新五代史）3、元史 2 編年類：資治通鑑・通鑑 1、宋朝通鑑 12/4、統通鑑（統
 資治通鑑長編）1、統宋通鑑（統宋編年資治通鑑）1、**少微通鑑**（少微通鑑節要）1 別史類：東觀漢記
 1、東都事略 1、十八史（十八史略）4 雜史類：戰國策 1 伝記類：列女傳（古列女傳）1、晉行錄・
 名臣象外集・言行錄外集（名臣言行象）5、才子傳（唐才子傳）141/26 載記類：越絕書 1 史鈔類：
 十七史詳節 3、國志・唐書詳節・十七史（十七史詳節）10 地理類：三輔黃圖・黃圖 5、元和志（元和郡
 縣志）1、方輿勝覽・方輿・勝覽・方輿統覽・方輿統集 78/14、大明一統志・一統志（明一統志）10、
 兩京紀（兩京新記）1、文粹 2、南唐書（南唐志）1 職官類：六典（唐六典）1 政書類：通典詳節（杜
 氏通典詳節）1、文獻通考・通考 8、漢官儀（漢官旧儀）1 目錄類：集古錄（歐陽集古錄）2 史評類：
 資治通鑑綱目・通鑑綱目・綱目・朱子通鑑綱目（朱子資治通鑑綱目）5/2、十七史通要（十七史纂古通要）1、
 詩史 1 **子部** 儒家類：說苑 1、揚子（揚子法言）1、桓譚新論（桓子新論）1、程氏・程氏附錄（二程
 遺書）2、朱子語錄・語錄（朱子語類）2 兵家類：尉繚子 1 法家類：韓非子 2 農家類：瑣碎錄（分
 門瑣碎錄）1 医家類：千金方（千金要方）1、新修本草 1、新編類證因注本草（類證本草）1、三因（三
 因方）1 術數類：類編曆法通書大全 1 芸術類：宣和畫譜 1、圖繪寶鑑・圖繪寶鑑補遺 5 雜家類：
 淮南子 3/3、白虎通（白虎通義）2、古今注 1、資暇集 1、容齋隨筆・容齋續筆・容齋四筆・容齋五筆 13、
 賓退錄 2、困學紀聞 9/1、復齋錄筆（能改齋漫）2、風俗通（風俗通義）2/1、塵史 1、冷齋夜話 3、鶴林玉
 露・鶴林 3/1、類說 14、皇朝類苑（事實類苑）2 類書類：蒙求（標題補注蒙求）1・初學記 1、太平御
 覽・御覽 5、事物紀原 1、海錄碎事・碎事 5、事文類聚・事類聚・事類・事文・類聚・事統 52/13、全芳備
 祖（全芳備祖集）1、合璧前集（古今合璧事類備要前集）1、源流至論（新篔決科古今源流至論）1、玉海・
 王 28/1、韻府（韻府群玉）18/1、氏族大全（排韻增廣事類氏族大全）2/1、事林廣記（新編纂圖增廣群書
 類要事林廣記）6/1、雜說（重刊增廣分門類雜說）1、翰墨全書・全書（新編事文類聚翰墨全書）5/1、詩
 學大成（聯新事備詩學大成）2 小說家類：世說（世說新語）1、國史補（唐國史補）1、明皇雜錄 3/1、
 開元遺事（開元天寶遺事）6、北夢瑣言 1、孫公談圃 1、鞍耕錄・南村鞍耕錄 2/2、海海新聞（海海新聞夷堅統志）
 1、山海經 3/1、搜神記 1、**搜神後記** 1、統齊諧記 2、杜陽雜篇（杜陽雜編）1、開元傳傳記 1、太平廣記・
 廣記 28/4、述異記 1/1 道家：老子經・老子（老子道德經）2、列子 1、莊子（莊子口義）13/1、神仙
 傳 3/1 **集部** 楚辭類：楚辭・楚詞（楚辭章句）15/4 別集類：<漢> 五代 4 陶集・淵明集（陶淵明集）3、
 杜集・杜詩某卷・杜詩批点（集千家注杜工部詩集）14/2、須溪校本王右丞集・王維集・維集 4/3、韋蘇州
 集・須溪先生校本韋應物集 4、韓文某卷（五百家注昌黎文集）13/2、柳文某卷（柳河東集・柳先生文集）3、
 孟東野詩集 1、李賀某卷（箋注評点李長吉歌詩）1、白氏文集・白氏長慶集・樂天詩集・白氏集 7、樊川集（樊
 川文集）3、丁卯集 2、雲臺編・雲臺集 8、鄭谷集（鄭守愚文集）1、**李群玉集**・群玉集（李群玉詩集）2
 <北宋> 和靖先生詩集（和靖詩集）1、範文正公別集 1、元豐彙（元豐類集）1、歐陽文忠公外集・歐陽文集・
 歐陽修文集・歐陽永叔集（文忠集）4、居士集 1、臨川（臨川集）1/1、王荊公詩集・王荊公集・荊公集（王
 荊公詩注）5、東坡集・坡集・坡力集・東坡某卷（增刊校正王狀元文集註分類東坡先生詩）34/2、增注山谷集・
 山谷集・谷集・山谷某卷（山谷內集注・外集注）9、山谷刀筆 1、大全朱子・大全（朱子文集大全類編）3、
 陳後山集（後山集）1、石門文集（石門文字禪）2 <南宋> 梅溪集・梅溪先生後集 3、楊誠齋集・江東集
 （誠齋集）8、渭南集（渭南文集）1、戴石屏詩集（石屏詩集）2、劉後村集・後村文集（後村集）4、北澗
 詩集 1 <元> 牧潛集・天隱文集 11/1、蒲室集 1、樵雲唱曲集（樵雲獨唱集）1 <明> 蘇平仲文集 1、鳴
 盛詩選（鳴盛集）1、全室集（全室外集）2/1、竹居集 2、東里楊文集（東里全集）1 總集類：文選・
 選・選六臣（六臣注文選）74/12、文選注 1、河岳英靈集 2、中興間氣集 1、文苑英華 1、百家詩選（唐百
 家詩選）1、**唐人絕句集**・絕句集（万首唐人絕句）2、文章正宗 1、中興江湖集・江湖集・中興（江湖小集・
 後集）4/1、中州集 2、唐詩鼓吹 5、風雅集（元風雅）4/1、鼎鑿（詩家鼎鑿）1/1、唐音・唐詩正音・正音・
 唐音遺響・唐音・遺響 36/48、古樂府 1、大雅集・太雅集 2/1、乾坤清氣集 1、皇明古岳英華集（殘本古岳
 英華）1、文章類選 1、統三体・統三体詩（統三体唐詩）6/1 **詩文評類**：詩法源流 7/4、詩話（六一詩話）
 2、呂居仁詩話（紫微詩話）3、詩話總龜 5、珊瑚詩話（珊瑚鈎詩話）1、石林詩話 2、韻語陽秋 1、琪溪詩
 話 1、唐詩（唐詩紀事）9/9、漁隱叢話・漁隱・隱叢話・胡荅漢（荅溪漁隱叢話）51/15、誠齋論（誠齋詩
 話）1、滄浪詩評（滄浪詩話）1、玉屑（詩人玉屑）45/11、詩林廣記・詩林 8/1、天厨禁脔 2、芸苑雌黃 2、
 群英草堂（增修箋注妙選羣英草堂詩餘）2、文式 2/1、剪灯新話（新增補相剪燈新話大全）2、剪灯餘話（新
 增全相海新奇剪灯餘話大全）1、皇明詩選 1

<附録 3>「著作集」の類：四庫類に書名を掲げていないもの

※ 1) はは時代順によって配列し、書名は幻雲抄の通りに記す。2)、3)、4) は前記の附録 2 に同様。5)

推測される作者名や書名を（ ）内に入れる。

漢：東方朔傳 2、三輔旧事（趙岐）2、函経（巴郡函経）1 晋：風土記（周處）1、廣志（郭義恭）1 隋：孝經述議（劉炫）1 唐：五臣（五臣注文選）1、唐史（吳兢）1、金陵六朝記1、盧氏雜錄（盧氏雜記）1、括地志（李泰ら）3、唐登科記（李竑）1、秦中記（秦中歲時記、李渾）1、格物論（盧鴻）1、白氏六帖六帖（白居易）2 五代：玉堂閑話（王仁裕）1 宋：職林（錢唐・楊侃）1、倦遊雜錄（張師正）1、笠翁軒記（唐子西）1、函経本草・本草・函経（蘇頌）16、遜齋閑記（陳正敏）2、海棠記（陳立）1、古文真宝（魁本大字諸儒箋解古文真宝）1/1、蔡寬夫詩話（蔡卞）3、王直方詩話（王直方）1、古今詩話（李頎）1、陳輔之詩話1、東坡長短句 1/1、東坡樂府1、麗情集（張君房）1、百一選方（是齋百一選方、王璆）1、百川学海・学海（左圭）9/2、博聞錄・博聞集（陳元觀）1/1、玉林中興詩話（黃昇）1、四靈集（永嘉四靈詩集）1、詩林萬選・萬選（何新之）5/12、輿地要覽（李和篋）2、廬山記拾遺（卜無咎）1、詩人膏馥・皇朝石公詩人膏馥 4 元：聯珠詩格・詩格（唐宋千家聯珠詩格、蔡正孫）12/10、開元別記1、江湖紀聞（新刊分類江湖紀聞、郭符鳳）1、混一方輿勝覽（大元混一方輿勝覽）1、十九史略（梁孟寅）1、綱目集覽・集覽（通鑑綱目集覽、王幼学）11/1、蘇州府志・蘇州志（盧熊）6/3、古文句解（標音古文句解精粹大全、何晦夫）2 明：羅山集（宋濂）1、林壑集（吳中林壑集）1、埤田藁（張楷）1、蔽子安次三体唐詩三体家法絕句之和・蔽子安次唐詩三体家法・蔽子安次三体家法・子安和三体・子安和 128/12、張楷和唐詩正音・張楷和唐音・張楷和 32/1 不明なもの：排韻 17/3、吟鑑集 2、中興吟鑑 1、光獄英華集 1、半山詩話 1、三居士詩話 1、詩家逸史 1、譚武記 2、駉駉集 1、三百家詩選 1

< 附録 4 > 「単一の詩文」の類

※ 1) 基本的に作者名は抄文中の記し方の一つを掲げ、ほぼ時代順によって配列する。2)、3)、4) は前記の附録 2 に同様。

唐以前：曹子建 2、淵明 7 唐：騰王閣序（王勃）1、宋之問 1、劉希夷 1、李白 6/2、杜甫 45、王維 1、王昌齡 1、寒山詩 1、劉長卿 1、岑參 2、高適 1、皇甫冉 1、錢起 1、韓翃 2、竇鞏 1、呂洞賓 1、柳宗元 5、孟郊 1、韓愈 11、白楽天・白楽天詩 8、李長吉 1、劉禹錫 5、賈嶋 1、張繼 1、張籍 1、元稹・元微之 2、趙嘏 2、李商隱 2、溫庭筠 1、杜牧・小杜 7/3、韋莊 1/1、陳陶 1、李義山 2/1、李群玉 2、杜荀鶴 1、武元衡 1、禪月詩（貫休）1、王建 1、李頎 1、鄭谷 1、孟遲 2、羅隱 2、薛能 1、司空圖 1、雍陶 1、崔魯 1、唐宣宗（李忱）1、陳陶 1、李廓 1、張翥 1、船子（船子和尚）1 宋：冠準 1、王元之 1、林和靖 2、歐陽公 4、荆公（王安石）2、沈存中 1、蘇黃氏（蘇轍）1、東坡 46/3、參寥 1、李元膺 1、山谷 16、陳後山・後山 2、張芸叟 2、呂居仁 1、韓子倉 1 < 以上北宋 > 簡齋詩（陳与義）1、誠齋（楊万里）9、朱熹 2、陸放翁 3、戴石屏 1、劉後村 4、葉苔磯 1、葉紹翁 1、甘東溪 1、方秋崖 1、張璪 1、嵩明教（覺范慧洪）1 < 以上南宋 > 元：孟攀鱗 1、趙子昂 1、黃晉卿 1、黃真卿 1、虞伯生 2 明：危進 1、季潭・全室 6 不明なもの：張明達 1、劉清叔 1、何顯直 1

< 付記 > 本稿は 2011 年度中華人民共和國教育部人文社会科学研究一般項目（規划基金項目 11YJA751047）「日本五山僧的抄物『三体詩幻雲抄』中漢籍征引狀況与室町时代的漢籍流布研究」の研究成果の一部である。なお、本稿は『北京師範大学・筑波大学中日語言研究与語言教育研討会』（2010 年 10 月 16 日～17 日於北京師範大学）における口頭発表の内容をもとに、大幅に加筆・修正を施したものである。口頭発表の際に貴重な御教示を賜りました方々に、心より感謝申し上げます。

（リュウ レイ 北京師範大学外国語文学学院日文系 副教授）